

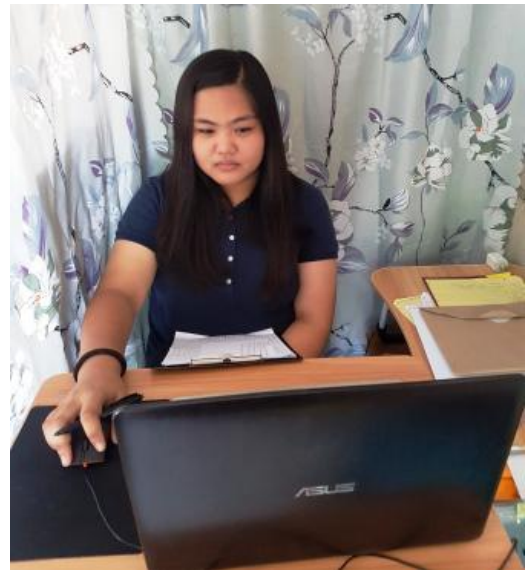
パ グ ア サ
PAG-ASA

JFC 奨学金基金報告
 パグアサー 夢・希望
 2020年9月

JFC奨学生達の新学期が10月5日から始まりました。通常フィリピンの新学期は6月から始まりますので、約4か月遅れの開始となりました。しかし、対面授業ではなく公立校はオンライン授業と自宅で教材を使って自主学習をする方法がとられています。

【新しい奨学生のご紹介：ジョイセル Pさん】

ジョイセル・Pさんは2020年10月から中央ルソン州立大学管理会計学部1年生になりました。日本人父親からの養育費は長い間止まっており、母親クラリタ・Pさんがシングルマザーとして彼女を育ててきました。しかし、母親の収入だけで大学4年間に終了することは難しいため、JFCネットワーク奨学生として支援をすることとなりました。(写真：オンライン授業を受けるジョイセルさん) ※通常でしたら、新しい奨学生の家庭訪問の報告をさせていただいておりますが、コロナ感染予防のため家庭訪問を中止しております。今号では、奨学生として大学生生活を頑張ると同時に、父親に対して認知請求裁判を起こしているジョイセルさんの背景をご紹介します。



2000年10月 ジョイセルさんの母親クラリタ・Pさんは、2度目の来日をし、栃木県足利市にあるクラブ「ペリー」でダンサーとして働きました。当時、彼女は19歳で未成年だったため、来日することができないとはいわれましたが、姉の出生証明書を利用してパスポートを作り、来日しました。

2000年12月 クラリタさんは、働いていたクラブで日本人男性M氏と出会いました。彼は、毎日のようにクラブに遊びに来て彼女を指名し、結婚をされていて子どもが二人いることを話してくれました。二人は惹かれ合い、恋人同士になりました。

その後、クラリタさんは、日本での仕事を終えフィリピンへ帰国しました。帰国前に、M氏は彼女に経済支援をしてくれると言いました。帰国後は、彼から毎日のように国際電話があり、月々約10万円の送金をしてくれました。彼からの経済支援は、当時病院に入院していた父親や私の生活費のために使いました。

2001年7月 クラリタさんは、3度目の来日をし、以前と同じクラブ「ペリー」でダンサーとして働きました。マスダ氏は、彼女がフィリピンに帰国している間に別のフィリピン人女

性と関係を持っていたようですが、彼女は彼を愛していたので関係を続けました。クラリタさんは、生理が10日経っても来なかったため、M氏に妊娠した可能性があると言いました。彼は、私は結婚できない、独身男性で良い人がいればそちらに行っても良い、と言いました。しかし、彼は妊娠を続けることを認め、経済的支援をすと言いました。

2002年1月 クラリタさんは、日本での仕事を終えフィリピンへ帰国しました。M氏は、毎日のように国際電話をしてきてくれました。また、経済支援も月々5万~10万円をEMSで送ってくれました。

2002年6月14日 クラリタさんは、娘ジョイセルさんを自宅で出産しました。父親であるM氏に娘を出産したことを伝えると、嬉しそうにしていました。名前は、M氏のイニシャルJと彼女のイニシャルCを合わせた名前 Joycel と名付けました。

2002年8月 マスダ氏がフィリピンを訪問し、娘ジョイセルさんを抱っこしてくれ、ホテル滞在中は一緒に遊んでくれました。

クラリタさんとM氏は、ジョイセルさんの出生届を提出するためにヌエバエシハ州サンホセ市役所に行きました。M氏は、市役所の弁護士の前でフィリピンの法律に基づいてジョイセルさんを認知しました。

その後も、M氏は月々5万円~10万円を送金してくれ、国際電話でコミュニケーションを取っていました。クラリタさんは、父親にジョイセルさんの成長を知ってもらいたかったので、写真やビデオを日本に住む彼の友人の住所に郵送し、M氏に渡してもらっていました。

2005年10月 M氏からEMSを受け取りましたが、経済支援のお金が入っていませんでした。クラリタさんは盗まれた可能性があるのではとM氏に説明をしましたが、この頃から徐々に関係が悪くなりました。その後、5万円の送金を受け取ったのが最後で、コミュニケーションも無くなってしまいました。

2006年12月 クラリタさんは、マニラに住む友人を通してJFCネットワーク-マリガヤハウスを知り、ケースを登録しました。

2007年6月 JFCネットワーク-マリガヤハウスを通して、M氏に対してジョイセルさんの養育費請求をしました。そして、マスダ氏から月々3万円の養育費を20歳まで受け取る、という合意を交わしました。しかし、数年後には養育費送金が止まってしまいました。

クラリタさんは、M氏に妻子がいる事を承知で彼との間に子どもを持ったことを彼女自身の過ちだと思い、彼に対して認知請求をするのは申し訳ないと感じていたそうです。しかし、M氏はジョイセルさんにとってたった一人の父親で、ジョイセルさん自身が父親に会いたいと幼いころから願っていました。そして、クラリタさんは母親として父親を相手取って裁判を起こすジョイセルさんを精神的にサポートすることを決めたそうです。